

国立国語研究所学術情報リポジトリ

談話の定量的分析：言語社会心理学的アプローチ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇佐美, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/3591

「自然言語処理 (natural language processing)」、「コンピュータ言語学 (computational linguistics)」なども関連が深くなっている。

大量データを扱うこと、工学者との連携などのイメージから、「談話の定量的分析」というと、この種のものゝを連想する人も多いかもしれない。しかし、本稿で後述する「言語社会心理学」では、「談話の構造」ではなく、「人間の相互作用としての会話」の分析を通して、「言語使用の原則」ひいては、「人間行動の原則」を説明することに主眼がある。定量的分析方法をとるという意味では、「自然言語処理」などと共通する面もあるが、むしろ、関心の持ち方は、以下に述べる社会言語学の中の一部のものにより近いと言える。

このように、今日では様々な領域で「談話研究」が盛んになっているが、社会言語学、語用論に近い領域で「談話研究」というと、最近では、むしろ言語学における狭義の談話分析ではなく、「話し言葉」における、ある程度長い「談話」、つまり、「会話」における「相互作用」に焦点を当てた研究を指すことが多くなってきたようである。これらの領域の中で、最近では、質問紙調査や談話完成法 (discourse-completion test) の結果からだけで

は明らかにできない、実際の相互作用におけるダイナミックな言語使用を捉える必要性が叫ばれるようになり、それが、昨今の「会話の分析」への関心の高さ、研究の増加となって表れている。それは、「言語を社会とのかかわりの中で捉えようとする社会言語学」や「言語使用の法則を説明しようとする語用論」の発展とほぼ期を一にしていると言ってもよい。しかし、「社会言語学」「語用論」それ自体が、広義には多岐にわたる領域とかかわっている上に、その中の一領域でもある「談話研究」が、また、上に述べたような様々な領域ともかかわっているため、談話研究に携わる各研究者の関心、学問的背景、方法論も様々である。こうなってくると、今日では、領域の境界線を引くのが困難であり、また、その必要もないと言えるだろう (注2)。しかし、ここで問題となってくるのが、方法論である。新しく、しかも学際的な領域であるため、方法論については、未だ確立していないばかりか、背後にある様々な領域間の対立をはらんでいる面もある。

「方法論」を必ずしも一つに定める必要はないが、今後は、各領域間の目的と方法についての意思疎通、意見交換、相互交流を密に行うことが必須になってくる。そうしたければ、広義の「談話研究」が総体として、真に有機的かつつながりを持つものにはなり得ないからである。

3 定量的分析とは?

「定量的分析」というと、質問紙調査による言語意識の調査などのように、比較的「大量」のデータを収集し、分析するものだと思っている人が多い。あるいは、ある分類項目に分類された現象 (例えば、あいづち等) の頻度や割合を算出していけば、「定量的分析」だと思っ人もいるかもしれない。しかし、以下に述べる言語社会心理学のアプローチで「会話の定量的分析」と言う際には、定量的とは、必ずしも「大量」を意味するものでもなければ、厳密には、単に頻度や割合を算出しただけのものを指すものでもないことを、まず明確にしておきたい。

会話を定量的に分析する意義を論じるためには、まず研究の「客観性」「信頼性」をどこに求めるかということ論じる必要がある。従来、社会科学 (特に心理学) では、客観的結論を導くためには、「追試験証」を可能とする実証的方法、すなわち自然科学的方法が取られるべきだと考えられてきた。社会科学における多くの現象や変数のように、本来数量ではないものも、数量で表せるように変換すれば、自然科学的処理が可能になり、結果の客観性がより保ちやすくなると考えられたのである。例えば、会話の分析において、言語の形式ではなく「相互作用」

を分析する際、コンテキストを考慮した入念な観察に基づく「定性的分析 (質的分析) — qualitative analysis」を行って、ある発話は「割り込み」であり、別の発話は「非割り込み」であるなどと分類し、その談話の流れや発話の機能、相互作用の意味を解釈し説明するという方法もある。しかし、同様の判断を、例えば、「割り込み」は、「[(interruption)]」、「非割り込み」は「[(non-interruption)]」というふうに、「コーディング」することは可能である。特に、言語形式ではなく、相互作用における「機能」をコーディングしていく際には、このコード自体に、既に、コーディングのプロセスにおける定性的分析による判断が反映されることになる。つまり、単なる言語形式の頻度算出などは異なり、会話の相互作用の定量的分析は、コーディングのプロセスにおいて、既に、定性的分析を含んでいるものであるということ強調しておきたい。そういう意味で、少なくとも相互作用としての会話の分析においては、定量的分析と定性的分析は決して対立するものではない。

しかし、定性的分析による判断をあえて記号化していくのは、基本的には、分析方法や結果の「客観性」「信頼性」を統計学的概念によって判断するためである。コーディングされた現象の頻度や全体における割合を算出し、

数量化すれば、例えば、その現象に男女差があるのか、文化差があるのかというような「研究課題 (research questions)」や「仮説」を、「統計的検定処理」によって検証することができるからである。また、最低二人でコーディングを行い、二人のコーダー間の一致率 (単純一致率に、偶然一致率を考慮した修正を加えたもの—Cohen's Kappa) (注3) を算出することによって、コーディングが、一人の研究者の主観的判断のみに基づくものではないという、コーダー間の信頼性 (inter-rater reliability) を判断できる。分類の信頼性を判断する kappa 値が一定の基準 (慣例的に 0.7 とされる) に達しない場合は、分類の定義や分類方法に問題があるとみなされ、それらの再検討・変更を要するとされている。つまり、言語社会心理学的アプローチにおける会話の定量的分析は、相互作用の機能の分類の主観性を最小限にとどめるためと、限られた数のデータにおいて見られるある種の傾向を、研究者の洞察のみに基づいて一般化することを極力避け、結果の客観性・信頼性を、統計的検定処理に基づいて判断するため有効となる。

一般的には、統計的検定処理を行うには、ある程度サンプルが大きいことが必要である。このことが、最初に述べたように、「定量的分析」というと質問紙調査などに

る研究に適して、両者は同等の価値を持つが、区別して考える必要があるからである。

例えば、「割り込みは、女性より男性に多い」という仮説のもと、男女の会話を数十組採集して分析した結果、全発話数に占める男性の割り込み発話の割合の平均は一二%、女性の割り込み発話の割合の平均は九%だったとする。さて、この結果だけから、「男性のほうが、割り込み発話が多い」と「一般化」できるだろうか。当然、答えは否である。また、洞察に基づいて、この一二%と九%の差が、「有意な差 (違い)」と言えるのかどうかを一生懸命考えても無意味である。その答えを、確率論的統計概念を用いて客観的に判断するのが、統計的検定である。つまり、割り込み行動に男女差があるか否かを研究の主目的とするのであれば、その客観的判断は、統計的検定に求めるのが、現状では最適であろう。目的に応じて、必ずしも統計的検定を行う必要はないが、統計的検定を行っていない研究では、「男性の割り込み発話の割合の平均は一二%、女性の割り込み発話の割合の平均は九%だった」という特定のケースにおける現象の「記述」はできても、「割り込み発話は、女性より男性に多い」という「仮説の検証」はできないということを、肝に銘じておくべきである。ゆえに、論文においても、そのよう

よって「大量」のデータを処理したものをイメージしやすいことと通じているのであり、それは間違ではない。しかし、厳密には、上に述べたように、例えば、自然会話における「割り込み」などのような現象を、記号化、数量化して扱い、統計的検定処理を行うものは、質問紙調査におけるインフォーマントの数などと比べると、相対的にデータ数は少なくても、「定量的分析」である。

また、逆に単にある言語形式の頻度や割合を算出し、数量で表したのや、相互作用における機能を扱っていても、分析項目の頻度や割合を算出するのみで、統計的検定処理を行っていないものは、本稿で論じる「会話の定量的分析」には含めないことにする。というのは、記述的な統計 (ある分析項目の頻度や割合を算出する) のみの研究は、統計的検定処理を行うものとは異なり、その目的が、むしろ、定性的分析のものに近いはずだからである。つまり、定量的分析 (統計的検定処理を含むもの) は、二つ以上のグループ間の比較検証などを目的とする仮説検証型の、研究に適し、定性的分析 (エスノメソッドロジー、記述統計のみのもの等) は、ある「現実」、すなわち、特定の状況の中で実際に行われている現象や相互作用を詳細に、あるいは、記述統計を用いて記述することによって、人間の行動や社会的秩序の一面を発見することを目的とす

な一般化をしているように捉えられる可能性のある表現はすべきではない。先の例のように、分析項目の割合などを算出しても、統計的検定処理をしていない研究は、項目を数量化しているものの、現象を「記述」しているという意味で、その結果の解釈の仕方、結論の導き方は、むしろ「定性的分析」に通じるものがある。そのことをしっかりと認識し、結論の記述の仕方にも細心の注意を払う必要があるということをおきたい。

次に、なぜ、質問紙調査などではない、「会話の定量的分析」というものが、イメージされにくいのかについて触れたい。それは、いわゆる社会学、社会言語学の流れの中における「会話の分析」においては、定性的分析 (質的分析) がほとんどで、定量的分析はほとんど行われていないからである。現在では、心理学の中でも、実証的方法が唯一絶対のものではないということが指摘され始め、パラダイムの転換の必要性が叫ばれるようになってきている。確かに、客観的結論を導くための方法は、一つではないだろう。しかし、特定のケースの記述が中心となる定性的分析の結果だけから明らかにできることにはどうしても限界があると言わざるを得ず、それだけでは、言語行動、ひいては人間の社会的行動のある種の原則の解明にまでは迫ることができない。ゆえに、人間行動の

らかと言うと、後述の「言語社会心理学的的方法論」に近いものとなっており、言語学の流れの中における会話分析へのアプローチには、バラエティーがあることを物語っている。このアプローチは、定性的分析、ケーススタディー的研究の代表的なものであり、従って、文字化の方法も、コンピュータ処理に適するように、考えられていない。また、後述のように、このタイプに属する研究の中には、十分な証拠がないまま結果を過度に一般化するような記述が目立つものも多く、タネンなどの研究には、非常に興味深い知見や指摘が多いにもかかわらず、方法的には、多くの問題をはらんでいると、筆者は捉えている。

そういう意味で、このタイプに分類される研究は、筆者が依拠する言語社会心理学的アプローチと、関心や対象が近いにもかかわらず、方法論が全く異なるので、ここで対照させながら少し論じておく。言語社会心理学的アプローチがこの方法論と決定的に異なるのは、主に、上記5と6の部分においてである。上記の方法論においては、研究者の解釈が「主観的」なものに終わらないようにするために、参加者と第三者に感想を求めるという方法を取っている。すなわち、導かれる結果の「客観性」「信頼性」を、参加者と第三者の感想によって保証しよう

としているのである。しかし、言語社会心理学的アプローチでは、参加者や第三者の感想や会話の解釈は、それ自体では、なら研究者の解釈の客観性を保証するものではないと捉える。従って、参加者や第三者の感想や会話の解釈は、フォロアーアップ・アンケートやフォロアーアップ・インタビューという形で、できる限り収集することとは推奨するが、それは、研究者の解釈の客観性を保証するためではなく、それらも当該の会話外の重要な二次的データとして、なんらかの形でコード化し、数的処理が施せる形に変換して、会話と併せて分析するためである。つまり、上記の5、6、つまり参加者や第三者の感想なら、質問紙調査の形にし、例えば、「今の会話であなたは自然に話せたと思うか」というような質問に対して、5段階評定(5-1とても自然に話せた-1全然自然に話せなかった)をさせるといいうようにして、なるべく数値として処理できるようにする。しかし、これらの結果も、あくまで研究対象の一部として扱い、タネンの方法論で言うような、研究者の解釈の客観性・信頼性を保証するものとしては捉えないということである。すなわち、言語社会心理学的アプローチの特徴は、定性的分析によって得られた様々な分析項目をコード化することによって、結果や解釈の客観性・信頼性は、基本的には、統計的検定処

理によってはかるといふ形をとるといふ点である。定量的分析が核となっているという所以である。

(3) チェイフ (Chafe, W. 1987) らに代表される言語学の流れの中における会話分析へのアプローチ

(2) と同様、チェイフらによる談話・会話分析も、エスノメソドロジーの知見に触発されて発展してきたが、興味を中心はあくまで言語としての談話の構成、機能、あるいは、談話における談話標識 (discourse marker) の機能などの「言語事象」にある。しかし、比較的大量の言語データの分析結果から談話に関するならかの一般法則や傾向を客観的な方法で導き出したという目的があるため、(2)とは異なり、定量的分析方法を取っている。また、言語資料を共有財産として蓄積することにも積極的に、文字化資料のデータベース化を念頭においた文字化の方法の開発や議論も盛んである。ここ二十数年の間に幾つかの研究機関、グループなどが、「基本的な文字化方法の原則」を開発している。さらに、それら数種類の文字化の原則を互いに開陳し、その研究目的との関係、長所・短所を考察するという論文集も既に出版されている (Edwards & Lampert, 1993)。この本の執筆者を見ると、心理学者と言語学者がほぼ半分ずつとなっており、このこ

とからも、アメリカにおいては、自然会話という共通の興味の対象のために、既に言語学者と心理学者の交流・協力が進んでいることがよく分かる。また、そのために、心理学の特徴の一つとも言える、統計処理によって客観性・信頼性を図るという方法も、自然会話分析を行う言語学者の一部(談話のコーパス作成に関係している(3)のアプローチを取る研究者等)の間では、既に一般的になっていると言ってもいいだろう。

多量のデータを扱うことを前提としていること、よってコンピュータ処理がしやすいように考えられていること、コーディングを行い数的処理をする場合もあることなどの点において、このアプローチは、筆者の依拠する言語社会心理学的アプローチと「方法的には」近いものとなっている。しかし、この言語学的アプローチでは、あくまで、談話や会話の構造の記述に主関心があるのに対して、言語社会心理学的アプローチでは、会話という相互作用のダイナミクスと、そこに反映された人間関係の原則の解明に主関心があるという点で、両者は異なっていると見えよう。

(4) 発達心理学者、社会心理学者らによる養育者と幼児の社会的相互作用研究の一環としての会話の分析

この心理学者たちの動向が、日本の社会言語学関係者には、最も知られていないと言ってもいいだろう。心理学の主要な興味は、言語行動も含めた人間の行動の一般法則の解明にある。心理学が今世紀半ばまで、徹底的な実証科学を目指してきた経緯から、心理学的研究においては、言語行動や自然会話分析に対するアプローチも、定量的処理をほぼ「暗黙の前提」としていると言ってもよい。心理学全体の中では、社会的相互作用としての会話を対象とする研究は相対的には少ないが、主に、母・父と子の対話の分析を中心とする第一言語習得研究のために、文字化の原則の検討、開発、データベース化が進んだ。例えば、CHILDES system (MacWhinney, 1995) では、スペイン語など英語以外の言語データの蓄積も進んでおり、一般の研究者の CHILDES へのデータの提供や使用も既に柔軟に行われている。日本語版も既に開発されている。しかし、全体的な問題として、このシステムは幼児の第一言語習得研究に適するように開発されているため、形態素の数や、タイプ・トークンの比率 (Type-Token Ratio) をほぼ自動的に算出するなど、種々の便利な機能を備えてはいるものの、大人の会話を分析する際には、あまり必要のないものが多い。また、日本語の大人の会話の特徴である、長い発話やその間に挿入される別

なので、ここでは詳述を避ける。

(1) のエスノメソドロジストのアプローチは、定性的分析方法を取る代表的なものである。また、(5) の認知心理学者らのアプローチも、必ずしも現象や行動の法則の一般化を目的としているわけではないという点で、意外にも (1) と共通点が多いと言える。(2) のアプローチやそれに類するものが、いわゆる社会言語学、言語教育学関係の中では、最も目にする事が多いアプローチであるが、このタイプの研究には、目的が現象の記述にあるのか、言語行動のなんらかの原則の一般化にあるのかが不明確なものが多い上に、先に述べたように、結果の客観性の求め方があいまいである。そのため、研究によっては、数少ないデータの分析を基に、過度に一般化するような記述の仕方が気になるものも多く、今後、その方法論、結果の記述の仕方などが、吟味される必要が多分にあるアプローチであると筆者は考えている。強調しておくが、ここで問題としている点は、データの数が少ないとか、定性的分析が定量的分析に劣るといふことでは決してない。最も問題なのは、その研究目的 (記述か一般化か) と方法論が一貫していない点である。

の話者の短い発話などの処理の仕方に工夫がなされていないなどの問題点があり、大人の会話の分析に適しているとは言えないという難点がある。

その他にも、心理学者による会話の研究には、コミュニケーション障害 (disorders of communication) 研究の一環として行われているもの、高齢者に対するコミュニケーション (Communication with older adults) の仕方に、ペビ・トーク (子供に対する話し方) と共通するものがあることを問題視する観点から行われているもの (注5) など、現実的な問題解決へのニーズや社会的な問題意識が動機となっている一連の研究がある。いずれも、言葉のやりとりの相互作用性、現象の社会性を重視する形で、六〇年代後半から盛んになってきている。

(5) 認知心理学者らによる認知の社会性の記述・解明を目的とするアプローチ

もう一つ心理学の流れの中において近年盛んになってきているのが、談話、会話の認知科学的研究である。心理学の中の新しい動向として、必ずしも定量的分析を前提としない方法も試みられるようになってきているが、このアプローチは、その代表的なものと言えよう。このアプローチについては、本特集でも別に紹介されるよう

5 定量的分析のタイプ (目的に応じた相違)

4で概観した(3)の言語学者を中心とするアプローチと、(4)の心理学者を中心とするアプローチは、先述したように、それぞれ興味の中心は異なるが、データの蓄積と共有、コンピュータ処理を念頭においているという点、定量的分析方法を取るといふ点で、以下に述べる「言語社会心理学的アプローチ」と共通している。ただ、言語学者は、コンピュータ処理がしやすいという時、データベースの中から、例えば、“going to”と“gonna”等が同じ意味を持つものとして、容易に検索、抽出できるといふようなことを重視して「文字化の原則」を開発しており (Gumpers & Benz, 1993)、いわゆるコーパスの作成自体が目的になっている場合も多い。一方、心理学者は、目的に応じて語彙の使用分布等、言語的な要素も扱うが、主に、様々な相互作用における各発話の機能が人間関係といかにかかわっているかということに主眼心がある場合が多い。従って、各発話の機能などのコーディングを行い、その頻度や割合を従属変数として、実験者が設定した独立変数 (話者の属性等) との相関関係や因果関係に関する仮説を統計処理によって検証することを目的としているものが多い。定性的分析とは異なり、あ

については触れることができなかつたが、現在、社会言語学の領域でも関心が高まってきている言語使用と人間の相互作用に焦点を当てた様々なテーマや題材にも、この方法でアプローチすることは可能である。例えば、「初対面の会話を比べると、本当に目上の人との会話で、より多く敬語を使っているのだろうか」、「若者同士の初対面の会話では、どのくらい常体を使っているのだろうか（スピーチレベルソフトが生じているのだろうか）、また、それはなぜか」、「普段常体で話している相手との会話の中で、どんなときに敬体を用いるのだろうか、その意図や効果は？」、「一体、敬体の機能は何なのか」、「終助詞やあいづちの使用は、ポライトネスと関係しているのか」、「割り込みは、男性のほうが多いのか」、それとも「力関係によるのか」、「英語の会話のほうが、日本語の会話より割り込みが多いのか」、「話題導入の頻度は、力関係によって違ってくるのか」、「日本人は褒められたとき、必ず否定し、アメリカ人は褒められたら、必ず「Thank you」と言うのか」等々。これらは、いずれも実際の会話データを基に、談話レベルで考察してこそ、言語と言語使用に関する新しい知見をもたらし得るテーマである。

以上、「談話の定量的分析」の一つの方法として、「会話分析への言語社会心理学的アプローチ」を紹介した。

昨今、社会言語学の領域でも、従来の「言語現象の静的な記述」から、「言語使用の動的な分析」へと関心が広がりつつある。それは、一見、質問紙調査から会話分析への関心の移行のようにも見える。しかし、本稿で論じたように、言語使用の動的な分析、すなわち、相互作用としての会話の分析は、主関心が言語にあるか人間にあるかを問わず、言語現象や人間関係の記述によってもたらされる知見を有効に活用してこそ意味あるものになる。言語社会心理学的アプローチが、「生きた会話」とともに、「録音された会話以外」の部分の分析も重視する所以である。

(うさみ・まゆみ 東京外国語大学助教授)

注

1 英語では、「Conversation Analysis」(CA)という。特に、後に述べるエスノメンドロジストたちの会話分析を表し、「Conversational Analysis」というと、タネンらに代表される社会言語学者のアプローチを指し、また、それらと区別するかのようになり、「心理学者は」、「Natural Conversation Analysis」、「Discourse Processes」という用語を用いるなど、用語の使い分けがなされる傾向にある。しかし、日本語で、「会話分析」というと、エスノメンドロジストのアプローチを想起する人もいれば、タネンらのアプローチを想起する人もいるなど、人によって捉え方が異なってくるようである。また、心理学者のアプローチを想

起する人は、未だ数少ないようである。ゆえに、日本語に英語における用語の使い分けを細かく反映させても、現状では紛らわしいだけだと判断し、今のところ、筆者は、「会話分析への言語社会心理学的アプローチ」のように、特定のアプローチを明記する場合以外は、いかなる立場、アプローチのものも含む用語として、「会話の分析」、あるいは、文脈に応じて、「談話研究」を用いている。

2 宇佐美(一九九九)では、ある分野と隣接領域の相互関係や境界線を従来のように固定的に捉えず、実際には、研究者の「視点」が従来で言う各分野を移動していると捉える。各領域や「学」というものの「動的」な捉え方を提起している。興味のある方は、そちらを参照されたい。

3 詳しい概念、計算法などについては、Bakeman and Gottman(1997)を参照されたい。また、上越教育大学の高本條治氏のホームページ(<http://www.kokemus.kokugo.juen.ac.jp>)には、Cohen's Kappasを計算するページが設けられている。基本的な計算には利用できるが、概念的な問題の質問などには対応していないので、それについては、各自原文にあたられたい。

4 第三者といっても、誰を指すのか、何人くらの同意があればよいのかなど、その選択自体が「主観的」であるという問題は明らかである。第三者の同意や納得が、研究者の「解釈の客観性」を保証するというような考え方をヘイスとした「方法論」は、「研究の方法論」とはとも思えないというのが、私見である。

5 これに関する研究の流れについては、宇佐美(一九九七b)にまとめている。興味のある方は、そちらを参照されたい。

6 この文字化の原則は、言語社会心理学的マップローチ、つまり相

互作用の定量的分析(コンビニエータによる分析項目の頻度の算出等)に適するように考えられている。しかし、定性的分析に使用するのにも何ら問題はない。また、研究の目的に応じて、特定の項目の文字化をより詳細にするなど、各研究者が部分的に調整して用いることを推奨している。詳しい文字化の方法、BTSI開発の目的と意図などについては、宇佐美(一九九七a)を参照されたい。また、問い合わせは、usamin@tsuts.ac.jp。

7 言語社会心理学的アプローチは、また緒についたばかりであり、完全にこの方法に基づく具体的研究はまだ数少ないが、萌芽的研究として、「アيسコース・ポライトネス」の原則の一つを明らかにしようとした、宇佐美(一九九八)、外国人と日本人の初対面会話の分析によって、その数量的特徴と印象形成について考察した西郡(一九九七)などが挙げられる。

引用文献

【日本語】
 サーサス他、西阪他訳(一九八九)『日常性の解剖学』(マルジュエ版)
 マイナード・K・泉子(一九九三)『会話分析』(くろしお出版)
 宇佐美まゆみ(一九九七a)『基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTS)の開発について』(日本人の談話行動のスクリーン・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作)文部省科学研究費基盤研究(C)研究成果報告書(この報告書は、以下のURLからダウンロードできる：<http://nihongo.human.metro-u.ac.jp/mic-j/nihongo/mic-j-kaivahml>)

- 宇佐美まゆみ (一九九七) 「高齢化社会におけるコミュニケーション環境整備のために」(『言語』第二十六巻第一三号、六〇一-六七頁、大修館書店)
- 宇佐美まゆみ (一九九八) 「初対面二者間会話における『マイスロース・ポライトネス』」(『ビューマン・コミュニケーション研究』四九一-六一頁、日本コミュニケーション学会)
- 宇佐美まゆみ (一九九九) 「視点としての日本語教育学」(『言語』第二十八巻第四号、七二一-八〇頁、大修館書店)
- 西郡仁朗 (一九九七) 「外国人と日本人の初対面会話の分析―数量的に見た特徴と印象の形成について―」(『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』文部省科学研究費基盤研究) (C) 研究成果報告書
- 〔英語〕
- Bakeman, R., and Gottman, J. (1997). *Observing interaction: An introduction to sequential analysis*. (2nd edition) Cambridge University Press.
- Edwards, J.A. & Lampert, M.D. (eds.) (1993) *Talking Data: Transcription and Coding in Discourse Research*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Gumperz, J.J. & Berenz, N. (1993) *Transcribing conversational exchanges*. In Edwards, J.A. & Lampert, M.D. (eds.), *Talking Data: Transcription and Coding in Discourse Research*. 91-121. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- MacWhinney, B. (1995). *The CHILDES project: tools for analyzing talk*. (2nd edition) Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

花蓮の芋



一九九八年に台湾東部の花蓮で山地区の日本語の資料を集めてきた。案内をつとめてくださったリンスさんは、こちらの興味を引きそうなることを色々話してくださいました。目頭の熟くなるような話も聞いた。

幼い頃父親を亡くした。母親の仕事で世話してくれたり、着物のお下がりをおくれたりした人がいた。日本人警官のMさんだった。

数回ともに大勢の日本人が花蓮港から送り返されることになり、倉庫で待たされていた。その中のMさんにお話をしようとして、リンスさんが出て残り残しのイモを握り出し、母親がサトウキビの汁で煮て持っていた。しかしMさんは自分で食入させた。母親はリンスさんからそれを聞くと、翌日兄弟全員にさらに多くのイモを握り返して持って行った。

⑧ 道 歩 の 散 ば の と こ

しかしMさんはやはり手をつけず、周遊の子供に食させた。小学校時代四年だけ学んだという日本語で語るリンスさん。短い文を重ねて語ることは、十分に感動的だった。仕事を休んで未知の日本人を案内してくださったのも、まっとうMさんはじめ多くの日本人がリンスさんにいい印象を与えたからだろう。

通りがかりに話しかけた山地区のおばあさんも、「日本人に会えてなつかしい」と言ってくれた。若い自治会長も、おばあさんから習い覚えたという日本語で、親しみをもって話してくれた。数年前の貴重な資料のコピーを用意してくれた人もいた。まっとうその背景には、いい思い出を残した日本人たちがいるのだろう。

花蓮の空港の売店で「花蓮薯(かれんいも)」の袋詰めを売っていた。サツマイモをサトウキビの汁で煮たものだった。袋の裏には日本語で「日本人が考え出した」と説明があった。その袋を見るたびにリンスさんを思い出して、Mさんを思いやり、台湾の日本語を考え出すようになった。

〔井上史雄 東京外国語大学教授〕